

アニメ『スノーマン』の魅力

永倉みゆき



私が幼かった頃は、テレビがようやく各家庭に一台ずつ普及し始めた時代で、私が住んでいた所では、放送されるチャンネルも、三つしかなかった。私はそのたった三つのチャンネルの、わずかな番組の中から、何曜日の時には何を見よう、と心待ちにしている、その時間がくると、テレビの前にぎゅんと座って見たものだった。そうして見た「鉄腕アトム」やら「鉄人28号」やら「狼少年ケン」やらは、主題歌の前奏から、番組終了後の提供会社のコーマーシャルの口調までも、大人になった今でさえかすかに記憶している。アニメ、というと、私の頭には、そうやって食い入るようにテレビを見ている自分の姿が浮かんでくる。映画よりも何よりも、テレビでのそういう形の出会いが、私にとってのアニメ

の原体験なのである。

あれから早や二十年余がたち、子どもやアニメをめぐる状況は、あまりにも大きく様変わりをした。

今や、見たい番組は、ビデオに録画すれば何度でも見ることができし、映画館に出かけなくても、レンタルビデオ屋に行けば、目ぼしい作品が揃っていつでも借りられる。ちょうど絵本を買ったり借りたりするように、今の子どもたちは、見たいアニメを見たときに、選んで手に取ることができるようになったのである。本当にうらやましい話だが、それなのに、である。何はさておいてもこの番組だけは、と思ったり、レンタルでは物足りず、買って自分のものにしたくなるような作品というのには、不思議にもめったに出会えない。これは、私がアニメに夢中になる年頃を過ぎてしまったせいもあるが、本当に良いものは、大人子どもの区別なく、人の心に響くということを考えると、それだけの理由ではないのかもしれない。なるほど、趣向の目新しいも

のは、次々と出てくるが、何度も繰り返し繰り返し見なくなるような、味わい深さのあるものは、本当に少ないのである。一過性のおかしさを追い、興味をくすぐることを第一に考えているような作品が多いように思える。それらの作品は、今ある他の作品よりも、さらに目立たせようとして、より刺激的に、より華やかに作られる。しかし、例えそれが一世を風靡しようと、ブームが去って忘れ去られてしまうと、跡形もなくなってしまう。子どもたちには、(大人にも)確かに、そういう類の面白さにワクワクしたり夢中になる一面もあるが、現代は、あまりにそういうものばかりが私達のまわりにあふれているので、これでもかこれでもかというような、奇をてらった、それでいてどこか同じような作品のオンパレードに、うんざりしてしまう。

そういう中で、ここに紹介する『スノーマン』のような作品を見つけると、旧友に会ったように、ホッとする。『スノーマン』に表現される世界は、

刺激とは全く逆の、一切の騒々しさを、雪が飲み込んでしまったような静かな世界なのである。さて、それでは降る雪に誘^{いざな}われるままに、『スノーマン』の魅力を探ってみよう。

物語は、クリスマスも間近いある朝から始まる。

男の子が目ざめてみると、何と外は雪。着替えるのももどかしく、彼は外へとび出し、雪だるま（スノーマン）を作る。そしてその日の真夜中のこと。男の子が、ふと目ざめて庭を見やると、スノーマンが親し気に、にっこりとあいさつをしてくるではないか。男の子は大喜びで、スノーマンを彼の家に招き入れ、家のあちこちの部屋を案内して回る。

実にここで、スノーマンが動き出しファンタジーの世界の扉が開かれたにもかかわらず、スノーマンが「さあ、きみに素敵な世界を見せてあげよう。」とばかりに、男の子をどこかへ連れて行くのではなく、まず男の子の招きに従って、彼の家に入って行

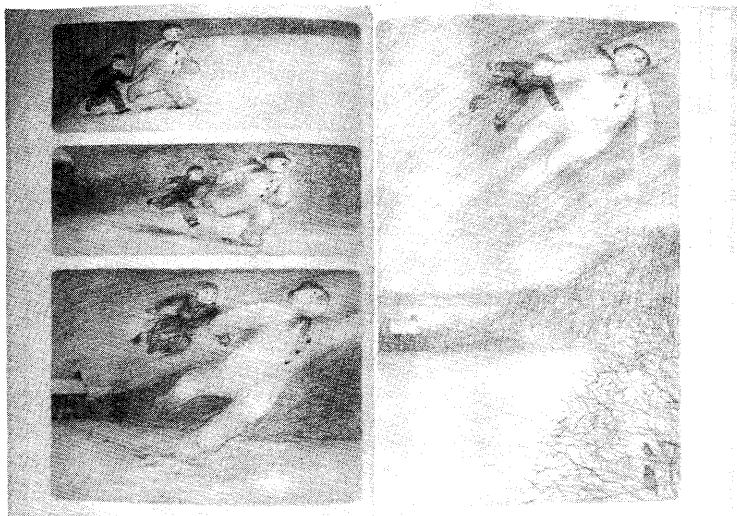
くところが面白い。これは、子どもが友だちをつくる時に言う「ねえ、ぼくんちに来ない。」というやり方と同じなのである。スノーマンは、超人^{スーパーマン}としてではなく、男の子の友だちとして登場するのである。

さて男の子は、まず居間へ案内し、寝ている猫を起こして驚かせたり、クリスマスツリーの丸い玉の飾りに顔をうつしたり、放送が終了してチカチカしているテレビの画面を見せたりと、様々なことをしてみせる。一方、スノーマンもそれにこたえて、電気のスイッチをつけたり消したりして遊んだり、と二人は実に気が合うのだ。居間の次は、台所。いろいろな調理器具や、調味料をちよつとずついじってみる。スノーマンは、そこで自分の飾りのついた^{スノーマン}ケーキを発見して大喜び。台所を満喫すると次は、両親の寝室。パパとママが、ぐっすり眠っているのを見きわめて、二人は、こっそりママの化粧台の前へ。入れ歯（この子のパパは、もう総入れ歯なのだ

ろうか?!)をはめたり頬紅をはいたり、揚句の果ては、洋服だんすから、パパのつりズボンやらママの飾りのついた帽子やら眼鏡やらを出してきて、変身ごっこである。このあたりの二人の姿を見ていると、家の人が留守の家に遊びに来た子どもというのは、きっとこんないたずらをするんだろうなあと思えてくる。そして、最後に、男の子の部屋へ。普通に考えると、まっ先に自分の部屋へと案内しそうなものだが、よく考えてみると、ああそうかと思いがた。子どもが、自分が城主である子ども部屋が、家の中で彼の一番好きな場所だろうと思ったら、それは間違っている。普段、入っちゃいけませんとか、触っちゃいけませんと禁止されていることほど魅力的に見えるということはあることなのだ。この男の子が、スノーマンにやってみせたこと——例えば、スイッチをつけたり消したりすること、台所でお湯を出してみることに、放送終了後のテレビの画面を見つめること、等々。——は、皆、きつと

「いたずらにやっではいけません。」と両親から常に言われていて、だからこそよけい面白そうでやりたかったことなのに違う。これらは、誰かに教えてもらったことではなくて、彼自身が発見した面白さなのである。両親の寝室での変身ごっこも、きつとそうなのだろう。こうして、二人だけの秘密の悪戯の時間ときは、降る雪と、夜の闇に、二重に覆い隠されて、いつまでも続いていく。

家の中の遊びが、ひと通り終わったら、次は庭に出て、パパのオートバイで近くの森をひと走り。右に左にとび去っていく木々や動物たち。このあたりからいちだんと、絵本の方では味わえない、動きのあるアニメならではの魅力にあふれてくる。そして圧巻は、男の子に、すっかり楽しませてもらったスノーマンが、お返しに男の子の手をひいて空をとぶシーンである。助走してふわりと舞い上がり、風の中の、森の上を旋回し、海へと向かっていく。海上では、クリスマスパーティーが開かれている



レイモンド・ブリッグズ作
『ゆきだるま』(評論社)より

客船の上を通ったかと思うと、海面すれすれの低空飛行をしてクジラの尾のすぐ上をすり抜けた。二人は、風に舞い上げられる雪さながらに、高く低く自在に飛び続ける。このシーンで、このアニメ中唯一の人の声である、ボーイソプラノの少年の、ちょっと物悲しい歌声が、北国の空や森や海の、白く張りつめたような美しさ、はかなさを、よりひきたたせる。これもまた絵本では味わえないおもしろさである。

ここで、くるりくるりと回りながら、小さく遠ざかっていく地面の様子を見ていたら、ふと、何年か前に、北海道で気球に乗った時の感覚を思い出した。飛行機のように、空を乗り物が移動するのではなくて、本当に、人が空に浮かび、飛んでいると実感できるようなスピードと高さ。それがこの『スノーマン』にはある。空を飛んでいる二人の目の高さから俯瞰された、森や海のくり広げる壮大な絵巻きを見てみると、自分もまた、空を舞っているかの

ような錯覚に陥ってしまう。とにかくこの場面に酔うためだけにでも、『スノーマン』を見る価値があるのかというものだ。

この場面を、原作の絵本の方では、空を飛んでいる絵、一枚一枚を、読み手が想像力でつなげることにより、一緒に飛行する感覚を味わうことになる。

絵本とアニメ、どちらの飛翔感もそれぞれに魅力的である。とかく絵本やマンガがアニメ化されると、登場人物だけ同じで、絵が動いているかいないかだけの違いだったり、ひどい（というか、多くの）場合は、想像力で補っていたものを、具体的に絵で示されてしまったため、イメージが壊され、がっかりさせられてしまうことさえある。それが、この『スノーマン』に関しては、アニメ化されることで、自分の抱いていたイメージが損なわれてしまうのではなく、むしろ新しいイメージを与えられる、という感じがするのが嬉しい。

さて、二人が空の散歩の末に舞い降りたのは、あ

る森の中。何やら楽し気なざわめきに誘われて行ってみると、そこには、男の子の作ったスノーマンとよく似たスノーマンたちが集まって、サンタクロースを囲んで今まさにダンスパーティーを始めようという所なのだった。スノーマンと男の子もさっそく仲間入りして、お菓子を食べたり音楽に合わせて歌ったり、と楽しくひとときを過ごす。そして宴の終わりには、サンタクロースから男の子へと、素敵なスカーフのプレゼント。（忘れてはならない。これと同じスカーフを、この『スノーマン』の冒頭で、世紀のスター、D・ボウイが巻いていたのだ！）二人は再び男の子の家に向かって飛び立って行く。そしてスノーマンとの別れ、自分の部屋に戻った男の子が、次の朝目覚めてみると、スノーマンは、溶けて消えてしまっていた。昨夜のことは、みんな夢だったのだろうか。しかし、男の子がふと思いついて探してみると、昨夜サンタクロースからもらったスカーフが……。

こうしてストーリーを紹介してしまうと、これから見ようとすると楽しみが半減するのでは、と思ってしまうが、そんなことはない。アニメ『スノーマン』

は、物語の筋だけでなく、画像や音楽だけでも十分に楽しむことができるからである。この作品は、原作の絵本同様、セリフひとつ文章による説明ひとつなく作られている。にもかかわらず、いや、だからこそ純粋に画像を味わうことができる。言葉による説明が多くなりすぎると、絵は言葉に頼ってもつ、人に何かを訴える力を失ってしまうからである。今、テレビで放送されているアニメで、音声を消した時に、画像だけでも、こちらに何か伝わってくる作品が、一体いくつあるだろうか。それほどまでに、私達の周りは、騒々しい言葉で満ちている。何かを伝えるのに、言葉は重要な伝達手段ではあるが、それなしでも伝わるもの、表現できるものはたくさんある。また、私達の中にも、言葉によら

ないメッセージを受け取る能力が、おおいにあるはずである。『スノーマン』は、そのことを私達にはつきりと教えてくれる。

言葉ではなく伝わるものを、受け取る能力は、理解する力ではなく、感じる力である。最近の世の中では、理解する力が重視されがちで、理解できないと困ることがあまりに多いため、子どもたちさえ、より早く、より多く理解する力をつける訓練に追われることが多い。言葉がまだ十分でない子どものうちこそ、この感じる力がまだ溢れるほどある時だというのに……。しかし、言葉の洗礼を受けてしまった私のような大人ですら、この『スノーマン』のような作品と出会うと、錆びついていた「感じる力」が、わずかにでも動き出す。

例えば、この作品は、全編に渡り、静かに音楽が流れているだけで、台詞はもちろん擬音すら一切ないが、画像を通して様々な音を聞くことができる。雪の降る音。沖の波のざわめく音。上空を通る風の

音……。中でも、雪が画面一杯にしんと降る場面からは、雪が、積雪の上に、かさり、かさりと次々に降り積む音が聞こえてくるような気がする。普段、このような音は、あまりにひそやかで、耳に入ることはないのだが、ひととき心を留めさせれば、いつでも聞くことができるのである。私達の周りは、目立たせるために、より刺激的に飾り立てられたもので満ちている。「過ぎたるは及ばざるがごとし」というように、一つであれば美しいものでも、十集まってしまうと、くどくなり、時には害悪にすらなってしまう例が、世の中にはままある。現代では、様々な所で、主張し合うもの達がひしめき合っている。そんな今だからこそ、『スノーマン』のように、優し気なバステル調のタッチ、やや暗めの落ち着いた色調、抑えた静かな音楽等々が、私達の心を安らがせ普段は聞こえないかそげき物音にも耳を傾ける余裕を与えてくれるのだろう。

それにしても、騒々しく慌しい現代ではある。こ

ちらが黙っていても、多くの情報の波が向こうから押し寄せてきて、あたふたしている間に一日が過ぎて行ってしまうようだ。ぼんやり夢を見ることよりも、夢をより早く実現することが第一にされてしまっているような気さえする。特に、十二月は師まで走る月だと言う。一年の終しまいを、駆け抜けて終わらせてしまわぬように、熱いお茶でスノーマンでも見ながら、ぼんやりと無駄な時を過ごす贅沢を、自分に許してやりたいものである。

(静岡大学教育学部附属幼稚園)